中学生の教師信頼感・友人信頼感と学校適応感の関連

前田健一・佐久間愛恵・新見直子

The relationship between trust for teachers and friends and school adjustment in junior high school students

Kenichi Maeda, Kanae Sakuma, and Naoko Niimi

本研究では，中学生の教師に対する信頼感と学校適応感の関連を検討した先行研究の調査方法に付随する問題点を検討するために，先行研究と同様の調査方法を使用するA群と改善した調査方法を使用するB群を比較した。また，友人に対する信頼感を調査するC群を設定し，教師に対する信頼感と友人に対する信頼感のどちらが学校適応感と関連しやすいかを比較検討した。その結果，先行研究の調査方法は改善の余地があること，教師に対する信頼感は友人に対する信頼感よりも中学生の学校適応感とより関連することが明らかになった。

キーワード：教師に対する信頼感，友人に対する信頼感，学校適応感，中学生

問題と目的

信頼感に関する従来の研究では，他者一般に対する信頼感を測定する場合が多く，特定の他者に対する信頼感を検討した研究は少ない。例えば，天貝（2001）は対人的信頼感とその関連要因を検討した先行研究を整理し，他者に対する信頼感が高い児童・生徒ほど，友人と良好な関係を築いており，自尊感情が高い傾向にあることを指摘している。また，天貝・杉原（1997）は，他者に対して信頼感を持っている中学生や高校生ほど，学校適応感も高いことを実証している。天貝（2001）や天貝・杉原（1997）では，誰に対する信頼感なのかを明確にしていないが，調査対象者が中学生や高校生であることから，彼らは自分たちにとって最も身近なコミュニケーションの対象である教師，友人，家族等に対する信頼感を想定して回答したものと考えられる。

信頼感の尺度は，他者一般に対する信頼感尺度と特定の他者に対する信頼感尺度に二分されるが，特に特定の他者に対する信頼感尺度が少ない現状にある（中井・庄司, 2008）。こうした現状を踏まえて，中井・庄司（2006）は，特定の他者として教師を取り上げ，中学生の「教師に対する信頼感尺度」（Students' Trust for Teachers，以下STT尺度と略す）を作成し，学年差を検討している。その結果，STT尺度のうち，「安心感」は中1が最も高く学年の進行につれて低下すること，逆に「不信」は学年の進行につれて高くなること，「正当性」（中井・庄司, 2008の役割遂行評価に相当）は3年生で低下することを見出している。その後，中井・庄司（2008）はSTT尺度を用いて，中学生の教師に対する信頼感と学校適応感との関連を検討している。STT尺度の3下位尺度のうち，不信

のみが優位な「不信優位型」，役割遂行評価のみが優位な「役割優位型」，安心感と役割遂行評価の両方が優位な「信頼型」，不信と役割遂行評価の両方が優位な「アンビバレント型」の 4 タイプの生徒を選出し，これら 4 タイプ間で 6 下位尺度（学習意欲，友人関係，進路意識，教師関係，規則への態度，特別活動への態度）の学校適応感を比較検討した。その結果，信頼型が学校適応感の 6 下位尺度中 4 下位尺度（学習意欲，友人関係，進路意識，特別活動への態度）において最も高い得点を示し，教師を信頼する生徒ほど学校適応感も高い関係にあることを明らかにしている。

中井・庄司（2006, 2008）の 2 つの研究は，教師という特定の他者に対する信頼感尺度を開発したことによって，特定の他者に対する信頼感や関連要因の研究を発展させるものといえる。例えば，教師に対する信頼感尺度の項目に使用されている「先生」という表記を友人等の他の表記に変更することによって，いろいろな他者に対する信頼感の測定尺度を開発することも可能である。しかし，こうした発展的な研究を試みる前に，中井・庄司（2006, 2008）の調査方法に付随する以下のような問題点を先に解決しておく必要がある。その問題点は，STT 尺度を実施する際の教示に関係している。すなわち，中井・庄司（2006, 2008）は，「特定の先生が思い浮かぶ場合には，その先生を思い浮かべて答えてください」，「特定の先生が思い浮かばない場合には，学校の平均的な先生について思い浮かべて答えてください」と教示している。このような教示を使用して STT 尺度を実施した場合には，以下のような問題が生じると懸念される。

第 1 に，中井・庄司（2006, 2008）の教示では，「特定の教師」を思い浮かべた生徒は，現在の中学校あるいは過去の小学校時代に実在した「特定の教師」を想定しながら，その特定の教師が STT 尺度の各項目にどの程度該当するかを評定していくと考えられる。それに対して，実在する特定の教師を思い浮かべられずに，「学校の平均的な教師」を思い浮かべて STT 尺度に回答した生徒は，実在する教師について評定していないと考えられる。おそらく，これまで出会った複数の教師に共通するイメージや複数の教師像を総合したイメージを想定して，STT 尺度の項目がどの程度該当するかを評定することになろう。イメージ化された複数の教師像に対する信頼感は，ある意味では教師一般に対する信頼感を測定していることになり，信頼感の程度が平均化される可能性が高い。この可能性を予防するためには，特定の教師が思い浮かばない場合にも，実在する 1 人の教師（例えば，学級担任）を想定させて STT 尺度に回答させる教示を与える必要がある。

第 2 に，「特定の教師」を思い浮かべるという教示では，信頼できる教師を思い浮かべる生徒だけでなく，逆に不信感を持つ教師を思い浮かべる生徒も混在する可能性がある。信頼できる特定の教師を想定した生徒は STT 尺度を高く評定するが，信頼できない特定の教師を想定した生徒は STT 尺度を低く評定すると考えられる。つまり，信頼できる特定の教師を思い浮かべた生徒が多くなればなるほど，特定の教師を想定した生徒群の全体平均値は上昇する。逆に，信頼できない特定の教師を思い浮かべた生徒が多くなればなるほど，特定の教師を想定した生徒群の全体平均値は低下する。また，信頼できる特定の教師と信頼できない特定の教師を想定した生徒数が同数に近づけば近づくほど，特定の教師を想定した生徒群の全体平均値は，尺度の平均値周辺の値を示すようになる。このような場合には，「学校の平均的な教師」に対する信頼感得点と「特定の教師」に対する信頼感得点の差は小さくなると予想される。

中井・庄司（2006，2008）の調査方法に付随する以上の2つの問題点を検討するために，本研究では以下のA群とB群を設定した。A群では中井・庄司（2006，2008）と同様に，「特定の教師」または「学校の平均的な教師」を想定してSTT尺度に回答させた。その後で，STT尺度の回答時に「特定の教師」を思い浮かべたか否かを回答するように求めた。さらに，特定の教師を想定した生徒の場合には，その教師の信頼度を5段階で評定させた。B群では，教師に関する質問を実施した後，STT尺度に回答させた。教師に関する質問では，信頼できる教師の有無を回答させた後，信頼できる教師がいる場合には最も信頼できる教師の信頼度を3段階で評定させた。その後で，「最も信頼できる教師」または「学級担任」を想定してSTT尺度に回答させた。これらの情報に基づいて，A群の中から，信頼できる特定の教師を想定した下位群（A1群）と特定の教師が思い浮かばずに学校の平均的な教師を想定した下位群（A2群）を選出した。同様に，B群の中から，信頼できる特定の教師を想定した下位群（B1群）と学級担任を想定した下位群（B2群）を選出した。

第1の問題点で指摘したように，「学校の平均的な教師」を想定したA2群の信頼感得点が平均化されるのであれば，A2群の信頼感得点は，信頼できる教師を思い浮かべられずに担任教師を想定したB2群よりも高くなると考えられる。一方，A1群とB1群はともに信頼できる教師を想定してSTT尺度に回答しているので，両群の信頼感得点はほぼ同等になると考えられる。本研究では，これら2点を確認するとともに，B1群とB2群の差がA1群とA2群の差よりも顕著であるか否かを確かめることによって，第1の問題点を検証する。第2の問題点は，A群の教師に関する質問の結果から検討する。「特定の教師」を思い浮かべた生徒の中に，信頼できない教師を思い浮かべた生徒が何人含まれているかを検討する。A群とB群を設定して，これらの問題点を検討することが本研究の第1の目的である。

ところで，中学生の時期は，対人関係に質的・量的な広がりをみせる時期である。保坂・岡村（1992）は，この時期の友人関係が，親からの自立に伴う不安や痛みを乗り越えていく安定基地として重要な意味を持つことを指摘している。中学生にとっては，教師だけでなく，友人も重要な他者であり，友人に対する信頼感も生徒の学校適応感と正の関連を示す可能性がある。事実，酒井・菅原・真榮城・菅原・北村（2002）や手塚・酒井（2007）等の研究では，友人に対する信頼感が学校適応感に正の関連を示すことを実証しており，その他の先行研究（例えば，大久保, 2005; 大前, 1998）でも友人関係が学校適応感と正の関連を示すことを報告している。これらの研究では，教師に対する信頼感あるいは友人に対する信頼感がともに学校適応感と関連することを実証しているが，ひとつの研究の中で教師に対する信頼感と友人に対する信頼感を測定し，どちらの信頼感が学校適応感とより関連が深いかを比較検討していない。

本研究の第2目的は，教師に対する信頼感と友人に対する信頼感のどちらが学校適応感と関連しやすいかを明らかにすることである。この目的を達成するために，以下のC群を設定した。C群では，友人に関する質問を実施した後，「友人に対する信頼感尺度」（Students' Trust for Friends，以下STF尺度と略す）に回答させた。友人に関する質問では，信頼できる友人の有無を回答させた後，信頼できる友人がいる場合には最も信頼できる友人の信頼度を3段階で評定させた。その後で，「最も信頼できる友人」または「学級の友人」を想定してSTF尺度に回答させた。これらの情報に基づ

いて，C 群の中から，信頼できる特定の友人を想定した下位群（C1 群）を選出し，学校適応感の各下位尺度について B1 群と比較検討する。

方　法

対象者　広島県内の中学校 1 校の生徒 226 名（男 108 名，女 118 名）を分析対象者とした。その内訳は中 1 が 78 名（男 37 名，女 41 名），中 2 が 73 名（男 36 名，女 37 名），中 3 が 75 名（男 35 名，女 40 名）であった。なお，後述する群別の人数内訳を示すと，A 群では中 1 が 24 名（男 10 名，女 14 名），中 2 が 22 名（男 13 名，女 9 名），中 3 が 25 名（男 12 名，女 13 名）の計 71 名（男 35 名，女 36 名）であった。B 群では中 1 が 26 名（男 13 名，女 13 名），中 2 が 27 名（男 13 名，女 14 名），中 3 が 24 名（男 13 名，女 11 名）の計 77 名（男 39 名，女 38 名）であった。C 群では中 1 が 28 名（男 14 名，女 14 名），中 2 が 24 名（男 10 名，女 14 名），中 3 が 26 名（男 10 名，女子 16 名）の計 78 名（男 34 名，女 44 名）であった。

実施時期　調査は，2008 年 11 月下旬に実施された。

手続き　調査は各クラス単位で担任教師の指示に従って集団実施されたが，各クラスの生徒の約 3 分の 1 ずつを A 群，B 群，C 群にランダムに割り当てられるように工夫した。具体的には，A 群，B 群，C 群別に異なる調査用紙を作成し，ABC の調査用紙を 1 セットとする順序で 1 つずつ順番に 1 つの封筒に入れて，各クラスの担任教師に送った。各担任教師には，封筒から調査用紙を 1 つずつ順番に取り出して各クラスの生徒に配布するように依頼した。個人が特定されることはないこと，回答しづらい項目がある場合は回答しなくてもよいことを調査用紙の表紙に印刷して説明し，自由意志による調査協力を求めた。

調査内容　各群の調査用紙はいずれも，以下の 3 つの質問群から構成されていた。そのうち，1 番目の「(1) 学校適応感尺度」は A 群，B 群，C 群の 3 群に共通していた。3 群の調査用紙は以下の点で異なっていた。すなわち，A 群の調査用紙は 2 番目に「(2) 教師に対する信頼感尺度」，3 番目に「(4) 教師に関する質問（A 群用）」の順に構成された。それに対して，B 群の調査用紙は逆に 2 番目に「(5) 教師に関する質問（B 群用）」，3 番目に「(2) 教師に対する信頼感尺度」の順に構成された。また，C 群の調査用紙は 2 番目に「(6) 友人に関する質問（C 群用）」，3 番目に「(3) 友人に対する信頼感尺度」の順に構成された。3 つの質問群の詳細は以下のとおりである。

(1) 学校適応感尺度　この尺度は，内藤・浅川・高瀬・古川・小泉（1986）が高校生を対象に作成し，佐藤・菅原（2007）が中学生に適用できるように語句を修正した尺度であり，「学習意欲」，「友人関係」，「進路意識」，「教師関係」，「規則への態度」，「特別活動への態度」の 6 下位尺度 36 項目から構成される（表 1）。「次の 1〜36 の事柄は，今のあなたに，どのくらいあてはまると思いますか。1〜5 の数字のどれかひとつに○をつけて答えてください。」と教示し，各項目の内容について「1. まったくあてはまらない」から「5. 非常にあてはまる」までの 5 件法で回答するように求めた。

(2) 教師に対する信頼感尺度（STT 尺度）　この尺度は，中井・庄司（2006）が作成した後，中井・庄司（2008）が各項目の信頼性と妥当性を検討して，「安心感」，「不信」，「役割遂行評価」の

表1　学校適応感尺度の質問項目

第1因子　学習意欲（α＝.84）
13. ある程度勉強は出来る方だ
9. 授業をよく理解している
23. 勉強が楽しいと思う
3. 勉強の目標を持って努力している
7. 勉強に積極的である
21. 家庭学習を毎日時間を決めてやる

第2因子　友人関係（α＝.82）
14. 自分には，多くの友人がいる
16. 自分は性格的に明るい方である
18. 楽しい友人関係を持っている
34. 人あたりがよく，人と積極的につきあおうとする
8. 悩みなどを話せる友人がいる
27. 自分はユーモアのある人間である

第3因子　進路意識（α＝.85）
6. 自分の進路目標は，はっきりとしている
25. 自分にあった進路を考えている
1. 進路について真剣に考えている
28. 将来なりたい職業を決めている
19. 自分の将来に希望をもっている
31. 進路についてよく調べる

第4因子　教師関係（α＝.84）
11. 友人のように親しみを感じる先生がいる
17. 何でも相談できる先生がいる
35. 先生と話す機会を自分で持とうとしている
33. この学校の先生を信頼している
2. 学校の先生と気軽に話せる
30. 先生によく質問をする

第5因子　規則への態度（α＝.88）
24. 自分で意識しなくても，学校のきまりを守れる方だ
20. 学校のきまりを守るという自覚を持っている
4. 学校のきまりをまじめに守っている
10. 学校のきまりは，あたりまえだと思う
29. 学校のきまりに対して不満はない
15. この学校の先生に対して素直である

第6因子　特別活動への態度（α＝.84）
5. 学級活動，学校の行事に積極的である
22. 学級活動，学校の行事をなまけない
32. 学級活動，学校の行事が楽しい
26. 学級活動，学校の行事に自主的に参加している
12. 学級活動，学校の行事には協力的である
36. 部活動に所属し，充実感を持っている

3 下位尺度 31 項目に精選した尺度である（表 2）。A 群に STT 尺度を実施する際には，予め次の教示を与えて，回答する教師を想定させた後，各項目の内容について「1. まったくそう思わない」から「4. 非常にそう思う」までの 4 件法で回答するように求めた。A 群に与えた教示は，「次の 1～31

の事柄は，先生のことについて書いた文章です。特定の先生が思い浮かぶ場合には，その先生を思い浮かべて，それぞれの文章にどのくらいあてはまるかを考えて，1～4 の数字に○をつけて答えてください。もし特定の先生が思い浮かばない場合には，学校の平均的な先生を思い浮かべて，その先生が以下のそれぞれの文章にどのくらいあてはまるかを考えて，1～4 の数字に○をつけて答えてください。」であった。

B 群では「(5) 教師に関する質問（B 群用)」を実施した後に STT 尺度を実施したので，次のよ

表2 教師に対する信頼感尺度(STT尺度)の質問項目

第1因子 安心感(α=.95)

10. 先生になら，いつでも相談ができると感じる
25. 私が不安なとき，先生に話を聞いてもらうと安心する
14. 私は，先生と話すと，気持ちが楽になることがある
31. 先生と話していると，困難なことに立ち向かう勇気がわいてくる
29. 私が悩んでいるとき，先生が私を支えてくれていると感じる
27. 将来のことがわからないときは，先生に相談してみようという気になる
1. 先生は，いつも私のことを気にかけてくれていると思う
22. 先生は，私を大事にしてくれていると感じる
19. 私が失敗したとき，先生なら，私の失敗をかばってくれると思う
5. 先生は，私の立場で気持ちを理解してくれていると思う
9. 先生なら，私との約束や秘密を守ってくれると思う

第2因子 不信(α=.92)

2. 先生は，自分の考えを押しつけてくると思う
20. 先生は，自分の機嫌で，態度が変わると思う
11. 先生は，一度言ったことを，ころころ変えると感じる
26. 先生の性格には，裏表があるように感じる
4. 先生は，威張っているように感じる
15. たとえ，まちがっているときでも，先生は自分のまちがいを認めないと思う
18. 先生は，言っていることと，やっていることに矛盾があると思う
6. 先生は，一部の人を，ひいきしていると思う
24. 先生は，他の生徒と私を比べていると感じる
8. 先生の考え方は否定的だと思う

第3因子 役割遂行評価(α=.92)

16. 先生は，悪いことは悪いと，はっきり言うと思う
3. 先生は，自信を持って指導を行っているように感じる
21. 先生は，教師としてたくさんの知識を持っていると思う
12. 先生は，正直であると思う
7. 先生は，質問したことには，きちんと答えてくれる
30. 先生は，決まりを守ると思う
28. 先生には正義感が感じられる
23. 先生には，教育者としての威厳があると思う
13. 先生は，何事にも一生懸命であると思う
17. 私がまちがっているときは，先生なら，きちんと叱ると思う

うな教示を与えた。「次の 1～31 の事柄は，先生のことについて書いた文章です。前の質問（教師に関する質問）で，自分の学校の中で信頼できると思う先生がいると答えた人は，あなたの最も信頼できると思う先生を一人思い浮かべてください。そして，その先生が以下のそれぞれの文章にどのくらいあてはまるかを考えて，1～4 の数字に○をつけて答えてください。前の質問（教師に関する質問）で，自分の学校の中で信頼できると思う先生がいないと答えた人は，あなたの学級担任の先生を思い浮かべてください。そして，学級担任の先生が以下のそれぞれの文章にどのくらいあてはまるかを考えて，1～4 の数字に○をつけて答えてください。」

(3) 友人に対する信頼感尺度（STF 尺度）　この尺度は，「教師に対する信頼感尺度（STT 尺度）」の項目のうち，主語を「先生」から「友人」に変更しても通用する 26 項目を選出して構成した尺度であり，友人に対する信頼感尺度（STF 尺度）と命名した（表 3）。C 群では「(6) 友人に関する質

表3　友人に対する信頼感尺度(STF尺度)の質問項目

第1因子　安心感(α=.91)
- 8. 友人になら，いつでも相談ができると感じる
- 20. 私が不安なとき，友人に話を聞いてもらうと安心する
- 12. 私は，友人と話すと，気持ちが楽になることがある
- 26. 友人と話していると，困難なことに立ち向かう勇気がわいてくる
- 24. 私が悩んでいるとき，友人が私を支えてくれていると感じる
- 22. 将来のことがわからないときは，友人に相談してみようという気になる
- 1. 友人は，いつも私のことを気にかけてくれていると思う
- 18. 友人は，私を大事にしてくれていると感じる
- 16. 私が失敗したとき，友人なら，私の失敗をかばってくれると思う
- 4. 友人は，私の立場で気持ちを理解してくれていると思う
- 7. 友人なら，私との約束や秘密を守ってくれると思う

第2因子　不信(α=.84)
- 2. 友人は，自分の考えを押しつけてくると思う
- 17. 友人は，自分の機嫌で，態度が変わると思う
- 9. 友人は，一度言ったことを，ころころ変えると感じる
- 21. 友人の性格には，裏表があるように感じる
- 3. 友人は，威張っているように感じる
- 13. たとえ，まちがっているときでも，友人は自分のまちがいを認めないと思う
- 15. 友人は言っていることと，やっていることに矛盾があると思う
- 19. 友人は，他の生徒と私を比べていると感じる
- 6. 友人の考え方は否定的だと思う

第3因子　役割遂行評価(α=.82)
- 14. 友人は，悪いことは悪いと，はっきり言うと思う
- 10. 友人は，正直であると思う
- 5. 友人は，質問したことには，きちんと答えてくれる
- 25. 友人は，決まりを守ると思う
- 23. 友人には正義感が感じられる
- 11. 友人は，何事にも一生懸命であると思う

問（C 群用）」を実施した後に STF 尺度を実施したので，STF 尺度を実施する前に次のような教示を与えた。「次の 1～26 の事柄は，友人のことについて書いた文章です。前の質問（友人に関する質問）で，信頼できると思う友人がいると答えた人は，あなたの最も信頼できると思う友人を一人思い浮かべてください。そして，その友人が以下のそれぞれの文章にどのくらいあてはまるかを考えて，1～4 の数字に○をつけて答えてください。前の質問（友人に関する質問）で，信頼できると思う友人がいないと答えた人は，ふだん話をする学級の友人を思い浮かべてください。そして，その学級の友人が以下のそれぞれの文章にどのくらいあてはまるかを考えて，1～4 の数字に○をつけて答えてください。」

（4）教師に関する質問（A 群用）　A 群では STT 尺度を実施した後に，「前の質問（STT 尺度）で，先生について答えるとき，特定の先生が思い浮かびましたか」と質問した。この質問に対して，「1. 思い浮かんだ」と回答した生徒には，その先生の信頼度を 5 段階（1. まったく信頼できない～5. とても信頼できる）で評定させた。「2. 思い浮かばなかった」と回答した生徒には，その時点で調査が終了することを記入して知らせた。

（5）教師に関する質問（B 群用）　B 群では STT 尺度を実施する前に，「あなたは，自分の学校の中で，信頼できると思う先生がいますか」と質問した。この質問に対して，「1. はい」と回答した生徒には，信頼できる教師のうち，最も信頼できる教師の信頼度を 3 段階（1. やや信頼できる～3. とても信頼できる）で評定させた。「2. いいえ」と回答した生徒には，次の STT 尺度の回答に進むように教示を与えた。

（6）友人に関する質問（C 群用）　C 群では STF 尺度を実施する前に，「あなたは，信頼できると思う友人がいますか」と質問した。この質問に対して，「1. はい」と回答した生徒には，信頼できる友人のうち，最も信頼できる友人の信頼度を 3 段階（1. やや信頼できる～3. とても信頼できる）で評定させた。「2. いいえ」と回答した生徒には，次の STF 尺度の回答に進むように教示を与えた。

結　果

目的 1 の検討　（1）A 群と B 群の人数内訳　表 4 は，「教師に関する質問」に対する A 群の回答に基づいて回答者の人数内訳を示したものである。表 4 の全体をみると，A 群では STT 尺度に回答するとき，「特定の教師」を想定して回答した生徒は 41 名であり，全体の 58%（41/71）を占めている。特定の教師を想定した 41 名のうち，32 名は特定の教師を「4. 少し信頼できる」か「5. 非常に信頼できる」と評定している。したがって，A 群では信頼できる特定の教師を想定して STT 尺度に回答した生徒は，全体の 45%（32/71）である。これら 32 名を A1 群とし，特定の教師が思い浮かばずに「学校の平均的な教師」を想定して STT 尺度に回答した生徒 30 名を A2 群として分類した。両群の人数について学年を要因とする χ^2 検定の結果，$\chi^2(2)=5.65$，$p<.10$ で有意傾向を示し，A1 群は中 1 で多いのに対して，A2 群は中 3 で多くなる傾向にあった。

表 5 は，B 群について表 1 と同様の人数内訳を示したものである。表 5 の全体をみると，B 群では「自分の学校の中で信頼できる先生」がいる生徒は 52 名であり，全体の 68%（52/77）を占めている。そのうち「2. かなり信頼できる」か「3. とても信頼できる」と評定した生徒は 42 名であり，

表4　A群の「教師に関する質問」に対する回答者の人数内訳

	中1	中2	中3	全体
特定の教師が思い浮かんだ生徒	18	11	12	41
1. 全く信頼できない	0	0	2	2
2. あまり信頼できない	2	1	1	4
3. どちらでもない	1	0	1	2
4. 少し信頼できる	4	6	3	13
5. 非常に信頼できる	11	4	4	19
信頼度の回答なし	0	0	1	1
特定の教師が思い浮かばなかった生徒	6	11	13	30
A1群	15	10	7	32
A2群	6	11	13	30
その他	3	1	5	9

表5　B群の「教師に関する質問」に対する回答者の人数内訳

	中1	中2	中3	全体
自分の学校の中で信頼できると思う先生がいる生徒	22	13	17	52
1. やや信頼できる	1	5	4	10
2. かなり信頼できる	9	1	8	18
3. とても信頼できる	12	7	5	24
自分の学校の中で信頼できると思う先生がいない生徒	4	14	7	25
B1群	21	8	13	42
B2群	4	14	7	25
その他	1	5	4	10

全体の 55%（42/77）であった。これら 42 名を B1 群とし，「自分の学校の中で信頼できる先生」がいなくて，STT 尺度では「学級担任」を想定して回答することになった生徒 25 名を B2 群として分類した。両群の人数について学年を要因とする χ^2検定を行った結果，$\chi^2(2)=11.42$, $p<.01$ で有意となり，B1 群は中 1 で有意に多かった。

（2）A1 群と A2 群の比較　表 6 は，学校適応感尺度と STT 尺度の各下位尺度得点別に，A1 群と A2 群の各平均値と標準偏差（*SD*）を示したものである。2（群）×3（学年）の分散分析を行った結果，群の主効果は学校適応感尺度の「学習意欲」（$F(1, 56)=6.55, p<.05$），「教師関係」（$F(1, 56)=8.60, p<.01$），「規則への態度」（$F(1, 56)=5.54, p<.05$）の 3 下位尺度および STT 尺度の「安心感」（$F(1, 56)=25.71, p<.001$），「不信」（$F(1, 56)=6.03, p<.05$），「役割遂行評価」（$F(1, 56)=15.26, p<.001$）の 3 下位尺度すべてにおいて有意となった。「不信」では A2 群が A1 群よりも有意に高かったが，他の 5 下位尺度では逆に A1 群が A2 群よりも有意に高かった。なお，学年の主効果は「規則への態度」（$F(2, 56)=3.63, p<.05$）でみられたが，その他の 8 下位尺度では学年の主効果も交互作用も有意でなかった。

（3）B1 群と B2 群の比較　表 7 は，表 6 と同様に 9 つの下位尺度得点別に，B1 群と B2 群の各平均値と標準偏差（*SD*）を示したものである。2（群）×3（学年）の分散分析を行った結果，群の

表6　A1群とA2群における各下位尺度得点の平均値と標準偏差（*SD*）

	A1群			A2群		
	中1	中2	中3	中1	中2	中3
	（15名）	（10名）	（7名）	（6名）	（11名）	（13名）
(1)学校適応感尺度						
学習意欲	3.58	3.37	3.57	2.83	2.52	3.38
	(0.81)	(0.51)	(1.21)	(1.01)	(0.93)	(0.82)
友人関係	4.06	3.73	3.86	4.03	3.45	3.82
	(1.02)	(0.60)	(0.90)	(0.32)	(0.80)	(0.97)
進路意識	3.32	3.47	3.62	2.69	3.09	3.63
	(0.94)	(0.62)	(0.94)	(0.60)	(1.15)	(0.97)
教師関係	3.70	3.25	3.57	2.89	2.36	3.21
	(0.74)	(0.67)	(1.13)	(1.10)	(1.03)	(0.76)
規則への態度	4.07	3.60	3.64	3.44	2.71	3.72
	(0.66)	(0.70)	(0.62)	(0.84)	(0.72)	(0.94)
特別活動への態度	4.29	4.17	3.79	3.89	3.61	4.08
	(0.64)	(0.72)	(0.64)	(0.71)	(0.94)	(0.49)
(2)教師に対する信頼感尺度（STT尺度）						
安心感	3.03	2.79	3.09	2.27	1.77	2.38
	(0.40)	(0.66)	(0.64)	(0.77)	(0.52)	(0.74)
不信	1.71	2.01	2.10	2.15	2.47	2.22
	(0.49)	(0.53)	(0.66)	(0.62)	(0.54)	(0.39)
役割遂行評価	3.61	3.31	3.26	3.08	2.64	2.95
	(0.27)	(0.58)	(0.43)	(0.41)	(0.56)	(0.58)

注)（　）内は*SD*

主効果は学校適応感尺度の「学習意欲」（$F(1, 61)=8.75, p<.01$），「友人関係」（$F(1, 61)=9.63, p<.01$），「教師関係」（$F(1, 61)=27.57, p<.001$），「規則への態度」（$F(1, 61)=20.20, p<.001$），「特別活動への態度」（$F(1, 61)=20.74, p<.001$）の 5 下位尺度および STT 尺度の「安心感」（$F(1, 61)=36.68, p<.001$），「不信」（$F(1, 61)=22.24, p<.001$），「役割遂行評価」（$F(1, 61)=28.53, p<.001$）の 3 下位尺度すべてで有意となった。「不信」では B2 群が B1 群よりも有意に高かったが，他の 7 下位尺度では逆に B1 群が B2 群よりも有意に高かった。なお，学年の主効果および交互作用は，いずれの下位尺度得点でも有意でなかった。

（4）A1 群と B1 群の比較　A 群と B 群のそれぞれの中から，信頼できる教師を想定して STT 尺度に回答したと考えられる A1 群と B1 群を取り出して，9 つの下位尺度得点について比較した。2（群）×3（学年）の分散分析を行った結果，群の主効果および交互作用はいずれの下位尺度得点でも有意でなかった。なお，学年の主効果は STT 尺度の「不信」（$F(2, 68)=5.38, p<.01$），「役割遂行評価」（$F(2, 68)=8.16, p<.01$）で有意となった。Bonferroni 法による多重比較の結果，「不信」では中 2 と中 3 が中 1 よりも有意に高く，「役割遂行評価」では逆に中 1 が中 2 や中 3 よりも有意に高かった。

（5）A2 群と B2 群の比較　A 群と B 群のそれぞれの中から，信頼できる教師を想定できずに「学校の平均的な教師」について回答した A2 群と「学級担任」について回答した B2 群を取り出して，

表7 B1群，B2群およびC1群における各下位尺度得点の平均値と標準偏差（*SD*）

	B1群			B2群			C1群		
	中1 (21名)	中2 (8名)	中3 (13名)	中1 (4名)	中2 (14名)	中3 (7名)	中1 (25名)	中2 (23名)	中3 (23名)
(1)学校適応感尺度									
学習意欲	3.50	3.50	3.56	2.92	2.30	3.17	3.21	3.02	3.15
	(1.09)	(0.76)	(0.74)	(0.73)	(0.58)	(1.03)	(0.90)	(0.93)	(0.91)
友人関係	4.07	4.10	4.03	2.96	3.70	3.17	4.15	3.81	4.02
	(0.86)	(0.81)	(0.71)	(1.39)	(0.80)	(1.32)	(0.58)	(0.69)	(0.61)
進路意識	3.57	3.67	4.01	3.00	3.18	3.40	3.17	3.30	3.69
	(1.01)	(0.93)	(1.02)	(1.60)	(1.03)	(1.20)	(0.82)	(1.06)	(0.75)
教師関係	3.38	3.88	3.77	2.17	2.36	2.33	3.14	2.84	3.57
	(1.05)	(0.72)	(0.89)	(0.83)	(0.78)	(1.21)	(0.71)	(0.70)	(0.76)
規則への態度	3.83	3.96	3.71	2.67	2.68	2.74	3.64	3.37	3.35
	(0.65)	(0.83)	(0.81)	(1.11)	(0.89)	(1.53)	(0.75)	(0.85)	(0.90)
特別活動への態度	4.12	4.29	4.37	2.88	3.78	2.69	4.01	3.81	3.88
	(0.65)	(0.67)	(0.70)	(1.26)	(0.87)	(1.67)	(0.72)	(0.71)	(0.62)
(2)教師または友人に対する信頼感尺度(STT尺度またはSTF尺度)									
安心感	3.23	3.00	2.85	1.80	2.04	2.08	3.24	3.16	3.40
	(0.56)	(0.61)	(0.44)	(0.54)	(0.78)	(0.74)	(0.54)	(0.35)	(0.47)
不信	1.48	1.99	1.88	2.98	2.49	2.46	1.71	1.91	1.83
	(0.46)	(0.53)	(0.57)	(0.93)	(0.71)	(1.02)	(0.46)	(0.40)	(0.64)
役割遂行評価	3.65	3.40	3.20	2.75	2.63	2.56	3.18	3.06	3.29
	(0.33)	(0.33)	(0.29)	(0.47)	(0.65)	(0.99)	(0.61)	(0.49)	(0.54)

注) ( )内は*SD*

9 つの下位尺度得点について比較した。2（群）×3（学年）の分散分析を行った結果，群の主効果は「規則への態度」（$F(1, 49)=4.14, p<.05$）で有意となり，A2 群が B2 群よりも有意に高かった。学年の主効果は学校適応感尺度の「学習意欲」（$F(2, 49)=5.76, p<.01$）で有意となり，中 3 が中 2 よりも有意に高かった。また，交互作用は「特別活動への態度」で有意となった。群の単純主効果の検定をした結果，中 3（$F(1, 49)=9.40, p<.01$）で有意となり，A2 群が B2 群よりも有意に高かった。

目的 2 の検討　(1) C 群の人数内訳　表 8 は，「友人に関する質問」に対する C 群の回答に基づいて回答者の人数内訳を示したものである。表 8 の全体をみると，学校の中で信頼できる友人を持つ生徒は 73 名であり，全体の 94%（73/78）を占めている。C 群では，信頼できる友人を持たない生徒が少なかった。そこで，以下の分析では B1 群と C1 群の比較から，目的 2 について検討する。なお，C1 群は B1 群と同様に，「2. かなり信頼できる」か「3. とても信頼できる」と評定した生徒のみから構成された。

(2) B1 群と C1 群の比較　表 7 に示す B1 群と C1 群の各平均値と標準偏差（*SD*）に基づいて，2（群）×3（学年）の分散分析を行った。その結果，群の主効果は学校適応感尺度の「学習意欲」（$F(1, 107)=4.33, p<.05$），「教師関係」（$F(1, 107)=8.79, p<.01$），「規則への態度」（$F(1, 107)=5.40, p<.05$），「特別活動への態度」（$F(1, 107)=6.71, p<.05$）の 4 下位尺度および STT 尺度・STF 尺度の「安心感」

（$F(1, 107)=5.94, p<.05$），「役割遂行評価」（$F(1, 107)=5.99, p<.05$）の 2 下位尺度で有意となった。安心感では C1 群が B1 群よりも有意に高かったが，他の 5 下位尺度では逆に B1 群が C1 群よりも有意に高かった。また，「役割遂行評価」では群×学年の交互作用が有意となった。群の単純主効果の検定の結果，中 1（$F(1, 107)=13.67, p<.001$）で有意となり，B1 群が C1 群よりも有意に高かった。なお，学年の主効果は「不信」（$F(2, 107)=4.89, p<.01$）で有意となり，中 2 が中 1 よりも有意に高かった。

表8　C群の「友人に関する質問」に対する回答者の人数内訳

	中1	中2	中3	全体
自分の学校の中で信頼できると思う友人がいる生徒	27	23	23	73
1. やや信頼できる	2	0	0	2
2. かなり信頼できる	6	5	11	22
3. とても信頼できる	19	18	12	49
自分の学校の中で信頼できると思う友人がいない生徒	1	1	3	5
C1群	25	23	23	71
C2群	1	1	3	5
その他	2	0	0	2

考　察

本研究の第 1 目的は，A1 群，A2 群，B1 群，B2 群の 4 群を設定して，中井・庄司（2006, 2008）の調査方法に付随する 2 つの問題点を検証することであった。第 1 の問題点は，特定の教師が思い浮かばない生徒に「学校の平均的な教師」を想定して信頼感を評定させると，教師一般に対する信頼感を測定していることになり，信頼感の程度が平均化される可能性があることであった。第 1 の問題点を検証するために，信頼感の 3 つの下位尺度得点について 4 つの群間比較を行った。その結果，A2 群と B2 群には有意な群間差はみられなかった。この結果は，A2 群の信頼感得点が平均化される可能性を支持しない。しかし，両群の平均値に注目すると，「安心感」と「役割遂行評価」では A2 群（順に，M=2.14，M=2.86）が B2 群（順に，M=2.01，M=2.63）よりも高く，逆に「不信」では A2 群（M=2.30）が B2 群（M=2.56）よりも低いことがわかる。これらの平均値の結果は，本研究の予想と一致する方向を示すものである。予想通り，A1 群と B1 群には有意な群間差がみられなかった。また，A1 群と A2 群の比較および B1 群と B2 群の比較では，3 つの下位尺度得点すべてにおいて有意な群間差が見出された。そこで，各群の平均値に注目して，B1 群と B2 群の差が A1 群と A2 群の差よりも大きいか否かを検討した。その結果，B1 群と B2 群の差（安心感 1.06，不信 0.86，役割遂行評価 0.83）は A1 群と A2 群の差（安心感 0.83，不信 0.41，役割遂行評価 0.58）よりも大きかった。以上の結果は，中井・庄司（2006, 2008）の調査方法に付随する第 1 の問題点が顕著ではないが多少は生じる可能性を示唆するものである。今後の調査では，B 群の学級担任のように実在する特定の人物を想定させて信頼感を評定させる調査方法を使用することが望ましいと考えられる。

第 2 の問題点は，「特定の教師」を想定させると，信頼できる教師と信頼できない教師が混在する

可能性があることであった。そこで，A 群の中で「特定の教師」を想定した生徒 41 名の内訳を検討した（表 4）。41 名の中で 6 名（15%）は特定の教師を「1. 全く信頼できない」か「2. あまり信頼できない」と回答した。それに対して，41 名中 32 名（78%）は特定の教師を「4. 少し信頼できる」か「5. 非常に信頼できる」と回答した。この結果を見る限り，「特定の教師」を想定するように指示された A 群でも，大多数の生徒は信頼できる特定の教師を想定していることがわかる。しかし，信頼できない特定の教師を想定した生徒も若干存在しており，第 2 の問題点が生じる可能性を完全に否定することはできない。興味深いことに，A 群では信頼できる特定の教師を想定した生徒が 32 名で全体の 45%（32/71）を占めているのに対して，B 群では信頼できる教師を回答した生徒が 52 名で全体の 68%（52/77）を占めていたことである。本研究では各学級の生徒を A 群と B 群にほぼランダムに振り分けたことを考慮すると，本研究の B 群のように信頼できる教師を想定させてから，その教師に対する信頼感を評定させる順序が望ましいと考えられる。

本研究の第 2 目的は，教師に対する信頼感と友人に対する信頼感のどちらが生徒の学校適応感と関連しやすいかを検討することであった。B1 群と C1 群を比較した結果，学校適応感の「学習意欲」，「教師関係」，「規則への態度」，「特別活動への態度」の 4 下位尺度ではいずれも，B1 群が C1 群よりも有意に高かった。これらの結果は，教師を信頼している生徒が友人を信頼している生徒よりも学校適応感が高いことを示している。この結果はおそらく，学校適応感の質問項目に起因していると思われる。表 1 からわかるように，「友人関係」を除くと，学校適応感の大部分が教師とのかかわりの深い学習活動や学校行事等の公的な学校生活の側面を反映する項目が多い。級友との社会的適応に関する項目をもっと多く含んだ学校適応感尺度を使用していたら，本研究とは異なる結果が得られたかもしれない。仲間からの受容度のように仲間関係や友人関係に特化した別の学校適応感尺度（Berndt & Keefe, 1995; Wentzel, 2003）を使用して，この関連を再検討することが今後の課題である。

引用文献

天貝由美子 (2001). 信頼感の発達心理学―思春期から老年期に至るまで 新曜社

天貝由美子・杉原一昭 (1997). 中・高校生の学校適応感と信頼感との関係 筑波大学心理学研究, **19**, 1-5.

Berndt, T. J., & Keefe, K. (1995). Friends' influence on adolescents' adjustment to school. *Child Development*, **66**, 1312-1329.

保坂　亨・岡村達也 (1992). キャンパス・エンカウンター・グループの意義とその実施上の思案 千葉大学教育学部研究紀要, **40**, 113-122.

内藤勇次・浅川潔司・高瀬克義・古川雅文・小泉令三 (1986). 高校生用学校環境適応感尺度作成の試み 兵庫教育大学研究紀要, **7**, 135-145.

中井大介・庄司一子 (2006). 中学生の教師に対する信頼感とその規定要因 教育心理学研究, **54**, 453-463.

中井大介・庄司一子 (2008). 中学生の教師に対する信頼感と学校適応感との関連 発達心理学研究,

19, 57-68.

大久保智生 (2005). 青年の学校への適応感とその規定要因―青年用適応感尺度の作成と学校別の検討― 教育心理学研究, **53**, 307-319.

大前泰彦 (1998). 中学生の学校適応感に関する研究 和歌山大学教育学部教育実践研究指導センター紀要, **8**, 33-40.

酒井 厚・菅原ますみ・眞榮城和美・菅原健介・北村俊則 (2002). 中学生の親および親友との信頼関係と学校適応 教育心理学研究, **50**, 12-22.

佐藤寿仁・菅原正和 (2007). 中学生における学校不適応と信頼感に関する研究 岩手大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要, **6**, 207-216.

手塚知子・酒井 厚 (2007). 高校生の親友関係と学校適応―学校内外の親友との信頼感の比較から― 教育実践学研究, **12**, 70-81.

Wentzel, K. R. (2003). School adjustment. In I. B. Weiner (Ed. in-chief), W. M. Reynolds & G. E. Miller (Ed.), *Handbook of psychology*: *Educational psychology*, Vol.7, pp.235-258. Hoboken, NJ: Wiley.